

文人畫選

第一輯 第二冊

特280-13



1200501172441

280

3

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始





文人畫選 第一輯第二冊

歸堂學人 大村西崖鑒輯

本書前冊、夾宣紙を用ゐたるに、細沙ありて版面を損し、爲に往々印刷の鮮明を缺けるを以て、今冊以後、用紙を改めて、越前産雞子牋とす。看者請ふ之を諒とせよ。

前冊評解第二紙表第八行、陳竹賓の陳は沈の誤。

一 元王蒙泉聲松韻圖 紙本水墨 高一尺七寸五厘 闊二尺一分

東京 山本二峯君藏

王叔明の小傳は前冊に出でたり。此圖は前出の松谿草堂圖と共に、乾隆御寶の一にして、孔廣陶の嶽雪樓書畫錄に著れたる名品なり。欸に云ふ。泉聲松韻。黃鶴山中人王蒙。爲子文廣文寫。圖上に乾隆帝の御題の七絶、及五寶の鈴あり。又明人廬山の張羽、京口の張緯、荆南の周蒼、南陽の邵復、及沈度五家の題詩あり。王時敏曾て此幅を藏す。故に下方兩角に、煙客鑒藏、太原王遜之氏收藏圖書の二印を見る。後御府に入れるなり。御題は乾隆二十三年の筆とす。何れの時賜出せしにや。王牟卿之を琉璃廠の肆に得、咸豐八年、我が安政五年、轉じて孔氏嶽雪樓の藏に歸せり。嶽雪樓鑒藏、及臣孔廣陶敬藏の二印は、即ち其記なり。石渠寶笈の璽下に、孔繼勳觀の印あるは、廣陶の先人寓目の記なり。今海を度りて日東に入れり。獨り之を有する二峯君の清福のみならず。亦實に我が藝苑の幸慶と謂ふべし。廣陶評して曰はく。叔明筆法を文敏に得たれども、實は則ち祖巨然よりす。此幅、崇山茂林の景を極む。信に神營心構の作なり。宜なり。雲林推して、五百年來、此君なしと爲すやと。看者亦此畫を讀みて、同感を惹かずばあらじ。



二 陸廣丹臺春曉圖 紙本水墨 高二尺五分 闊八寸六分

東京 山本二峯君藏

元人陸廣。字は季宏。天游生と號す。吳の人なり。畫法王叔明に仿ひ、亦曹雲西の如く、蕭散幽淡を以て宗と爲す。其樹枝鸞舞ひ蛇驚くの勢ありと謂はる。本圖は其遺作中の最も著名なるものにして、曾て高士奇の鑒藏に歸し、左下隅に其圖書記あり。江村銷夏錄に出づ。又吳子敏の大觀錄にも出でたり。曰はく、歟後詩を寫す。甚だ端楷。歟下及書の左に元印を押す。樹の高さ五寸。山峯平遠。臺山地に架す。行筆疎率と雖も、而も布置楚楚たり。下坡澹墨輕勾。神清く韻逸なり。圖僅に尺幅にして、聲價雲林の下に在らず。其品既に高く。筆墨世に傳ふること少しと。以て其稀觀の寶蹟たるを知るべし。

三 明王絳層巒疊嶂圖 紙本水墨 高三尺一寸四分 闊一尺六寸三分

東京 山本二峯君藏

王絳字は孟端。友石生と號す。無錫の人なり。少より志氣高逸、博學にして古詩歌に工なり。嘗て北江淮に遊び、黄河に浮び、太行に上り、雁門を出で、形勝を周覽し、感慨古を弔す。一時聞人其名を慕ひて争ひて之を延致す。其氣貌瓊岸、議論蹕厲を觀るに及びて、益器重を加ふ。之を久しうして江南に歸り、九龍山中に隱れ、又九龍山人と號す。永樂中、能書を以て薦められて翰林に入り、擢てられて中書舍人と爲る。山水王蒙を師とし、長江遠山、叢篁怪石、絶妙ならざるなく、畫竹は當時の第一たり。毎に酒酣にして、賓客に對し、黃冠服を著け、意氣傲然、袂を攘ひて筆を揮ふ。奇怪跌宕、名狀すべからず。畫き已りて、徐ろに五字詩を吟す。蕭然風人の致あり。金帛を投じて片楮を購ふ者あれば、輒ち袖を拂ひて起つ。人之を諫むる者あり。輒ち曰はく、丈夫宜しく處する所を審にすべし。輕き者此の如し。重き者將何を以てせむやと。月下吹簫の聲を聞き、輿に乗じて竹石圖を寫し、明且其人を訪ひて

之を贈る。則ち估客なり。客饒るに紅氍毹を以てし、更に一枝を寫して配と爲さむことを請ふ。孟端笑ひて曰はく、我簫聲の爲に訪ふ。汝簫材を以て報す。汝は俗子なりと。前畫を索めて之を裂く。朝貴畫を請ふ所あるも、亦往々是の如し。高介絶俗。古人を以て自から期し、藝事の爲に役せられず。元の至正二十二年に生れ、永樂十四年春、京寓に卒す。歳五十五。明史に本傳あり。此畫洪武二十六年秋、九龍山中に在りて、郷友敬齋の爲に作る所。蒼莽の趣、能く黃鶴山樵の長を奪ひ、渾然たる妙味、幾ど有明一代に獨絶すと稱すべし。

四 謝時臣春壑雲泉圖 絹本淡彩 高五尺九寸八分 闊二尺九寸五分

東京 林屋秋嶺君藏

謝時臣字は思忠。榜仙と號す。蘇州の人。詩を善くし、山水に工なり。最も屏障鉅幅長卷を能くし、縱横自如たり。其筆法、沈石田より出でて頗る之を變ず。人物點綴、極めて瀟灑。尤も水を畫くに長じ、江湖湖海、種々皆妙なり。唯惜むらくは、氣勢餘りありて韶秀足らず。絲理の病なくばあらず。蓋し其技風吳浙の二派を兼ねて、作家の域に入れるが爲のみ。姜紹書、徐楚公共に之を言ふ。蓋し定評なり。本圖乃ち其得意の鉅幅にして、健拔の筆を觀るに宜しき佳作とす。看者能く其取るべき處を取りて、而して其贖を去らば、則ち亦學ぶに足らむ。

五 黃文立山中課子圖 紙本水墨 高四尺六寸八分 闊一尺七寸一分

熊本 中村 艮君藏

黃文立字は質先。歟印に由りて之を知る。然れども、其傳記は編者未だ之を詳にせず。明畫錄、無聲詩史等、竝に所見なし。然れども、此畫に由りて推考するに、蓋し明人なるべし。樹石の筆致、稍浙習を帯びたりと雖も、雅致仍拘すべきものあり。樹法亦頗る賞するに堪へたり。錄して以て後考を期すと云ふ。

六、七、八馬守眞畫冊 紙本水墨及淡彩 每頁高八寸五分 闊六寸三分

東京 副島延一君藏

馬守眞字は湘蘭。小字は元兒。又月嬌と號す。金陵の妓にして南曲中の一人なり。詩畫を以て名を擅にす。殊に蘭を善くするを以て、湘蘭の名獨り著る。蘭は趙子固に仿ひ、竹は管中姬を法とし、蕭灑恬雅、俱に能く餘韻を襲ふ。王穉登と友とし善し。一時煙花を擅にする、其志に非ざるなり。居る所秦淮の勝處に在るが故に、其畫惟風雅者の珍とする所たるのみならず。名海外に聞え、暹羅國の使者、亦其畫扇を購ふて之を藏することを知れり。萬曆中、穉登年七十。湘蘭金陵より蘇州に往き、酒を置いて壽を爲し、燕飲月を累ね、歌舞且に達す。金蘭の勝事たり。歸りて未だ幾ならずして病む。然燈禮佛、沐浴して衣を更め、端坐して逝く。詩二卷あり。伯穀之が序を爲り、又輓歌詞六首を賦す。詞客舊院を過る者、皆詩を爲りて之を弔す。其文采風流、想ひ見るべし。茲に掲ぐる所の畫册、水墨山水六頁、淡彩水墨蘭各三頁あり。末頁の識語に依りて、萬曆四十一年の作なること知らる。今其第一二幅と第八幅(淡彩)とを出す。餘は當に嗣後之を載すべし。今此三頁、亦以て其面目の一斑を鑒賞するに足る。此畫已に實大に影寫せるを以て、卷末款印を別載せず。

九 清釋弘仁梅竹高士圖

紙本水墨 高三尺三寸九分 潤九寸五分

東京 副島延一君藏

釋弘仁、一に宏仁に作る。字は漸江。梅花古衲と號す。歛の人。俗姓は江、名は籍、字は六奇。明の諸生なり。少にして孤貧。性癖。鉛槧を以て母を養ふ。一日米を負ひて行くこと三十里。期に逮はず。練江に赴いて死せむと欲す。母歿後、婚せず、宦せず。甲申後遂に僧と爲り、後新安に返る。歳ごとに必數黃山に遊び、毎に武夷の勝を歎す。既にして山に入りて性命の學を研究すれども、願の如きことを獲ず。臨終の時、帽を擲ちて、我が佛如來觀世音と大呼して逝く。披雲峯下に葬らる。友人其志に従ひ、梅花數十本を植う。畫を善くし、初め宋人を慕ひ、又黃

一峯を學び、晩に雲林を法とし、終に清閨三昧に入る。尤も好みて黃山の松石を畫く。人争ひて之を寶とす。江南の人、其蹟を藏すると否とに由りて、雅俗を定むること、猶古の雲林の如くなりしと云ふ。新安の畫家、多く清閨を宗とするは、蓋し浙江先路を道びけるなり。張浦山其畫を評して曰はく。層巒陡壑、偉峻沈厚。世の疎林枯樹もて、自から高士と謂ふ者の比に非ざるなりと。茲に出す所の圖は、康熙三十一年の作にして、蓋し其暮年の蹟なり。皴法善く雲林の神を得、而も梅竹に至りては、頗る夏禹玉の趣を兼ねたり。謂はゆる宋元に入出すとは、げに此の如きを言ふのみ。學者須らく一臨して、以て這裡の消息を窺ふべし。

十 梅清畫册

紙本水墨 各頁高八寸九分 潤七寸

東京 菊池惺堂君藏

梅清の小傳は前册に出せり。本圖は其自から老興猶存と題したる畫册八頁の一にして、其最も奇趣に富める樹法の妙を賞するに宜し。册中の款印、皆集めて卷末に載す。

十一 王翬嵩山草堂圖

紙本水墨 高四尺一寸五分 五厘 潤一尺四寸三分

東京 山本二峯君藏

王翬字は石谷。又字を臞樵と云ふ。耕煙外史と號す。又烏目山人、劒門樵客、清暉老人等の別號あり。江蘇常熟の人。幼にして畫を好み、張珂に従ひて遊ぶ。運筆構思適に時流を出づ。王廉州虞山に遊ぶ。石谷呈するに畫扇を以てす。廉州大いに驚異し、載せて共に歸る。石谷是より廉州に就いて其指授を受く。先古法書を學ぶこと數月。後汎く古人の名蹟を撫し、技遂に大いに進む。廉州の遠宦するや、引いて王奉常に謁せしむ。奉常器重措かず。挈へて江の南北に遊び、徧く收藏家の秘本を臨せしむ。石谷力學心悟、遂に南北を併合して一代の作家たり。奉常呼ぶに畫聖を以てし、其題跋中、言を極めて石谷を推賞すること一二にして足らず。時に奉常廉州と共に江左の三王と稱

せられ、百年來の第一人と謂はる。東宮其名を聞き、野服を許して之を召見し、待つに不臣を以てし、坐を旁に賜ひて畫を作らしめ、磨賞之餘、山水清暉の四大字を書して之を賜ふ。清暉老人の號、乃ち之に由る。又曾て詔を奉じて南巡圖を作る。一時公卿題贈極めて多し。明の崇禎五年に生れ、康熙五十九年卒す。歳八十九。此圖其遺作中の佳品にして、加ふるに紙素完潔、筆痕清麗。吾人の臨撫して學ぶに宜しきもの、幾ど之に過ぐるなし。眞に日東流傳中の劇蹟とす。二峯君親しく之を瀝人龐萊臣より獲て携へ來り、日夕披玩、愛賞措かず。良に以あるなり。

三三 董邦達山水册 金鑲水墨 各頁方一尺三寸六分

東京 黒澤禮吉君藏

董邦達字は孚存。東山と號す。富陽の人なり。雍正元年貢生に選拔せられ、十一年進士と成り、庶吉士に改まり、乾隆二年編修を授けらる。時方に石渠寶笈、祕殿珠林、西清古鑑等の諸書を修む。邦達、博學精考を以て、内廷に入りて事を襄し、官を累ねて禮部尙書に至る。三十四年七月京邸に卒す。諡を文恪と賜ふ。生平榮利に淡く、翰林に官し、屋一廬を儲り、門を閉ぢ、生徒を集めて講肄す。從ひて遊ぶ者多し。書は篆隸を善くして妙に古法を得、畫は宋元諸家に入出して、自から一家を成せり。高宗深く之を賞し、勅を奉じて作る所甚多く、皆石渠に藏せらる。今册亦其一にして、今十二幀あり。此に出すは第二と第十二にして、謹厚精嚴、應制の作たるに負かざるを見るべし。

十四 馬荃蓮花圖 絹本設色 高三尺四寸二分 闊八寸七分五厘

東京 男爵杉溪六橋君藏

馬荃字は江香。扶義の孫女にして、興充和の室なり。其曾祖父眉、父南平亦皆寫生を善くす。江香家法を傳へて花草を工にす。充和亦書畫を善くす。家貧しきを以て、京師に至り、繪事を以て衣食を給す。充和歿して後、故里常

熟に歸り、節を守りて身を終ふ。本圖道光二十六年、我が弘化三年作る所。以て常州派沒骨花卉近古の風を見るに足れり。

十五 釋虛谷虛橋圖 紙本淡彩 高三尺二寸 闊一尺二寸九分

東京 田邊碧堂君藏

虛谷は未だ其傳を詳にせずと雖も、上海の僧にして、光緒年間の人なりと聞く。今此の圖に由りて觀るに、現代の吳俊卿に似たる趣ありて、縱逸頗る賞すべく、以て近時の風潮を徵することを得。

十六 日本田能村竹田芭蕉像 紙本淡彩 闊九寸六分五厘

東京 本山竹莊君藏

圖上に茂樵の書にして有名なる蕉翁の猿蓑の初句を題せり。

十七 谷文晁秋山煙靄圖 絹本淡彩 高三尺三寸二分 闊一尺一寸九分

東京 廣瀬定次郎君藏

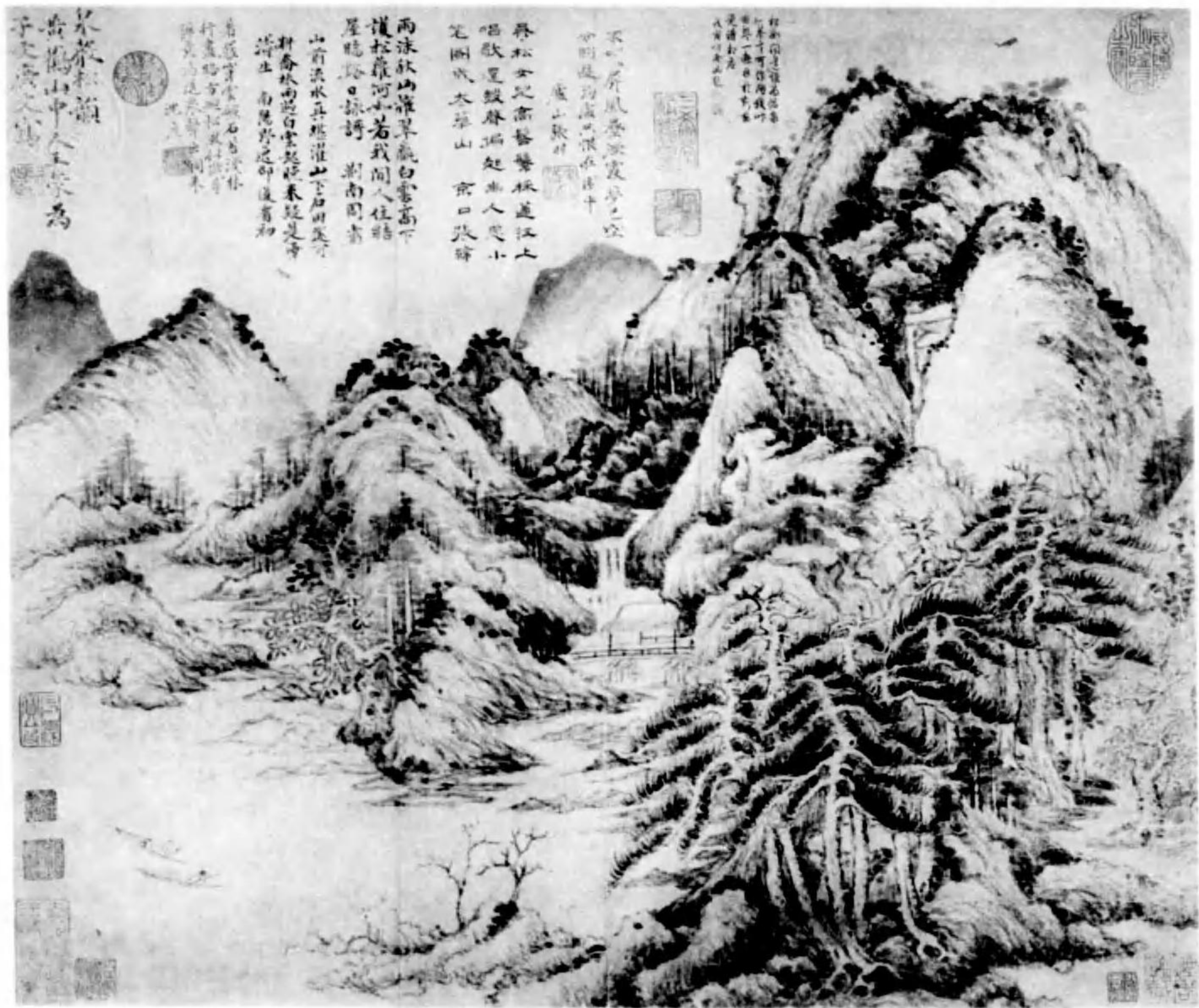
此畫は、著名なる水戸の煙草賈廣瀨氏が、文晁に囑して畫かしめ、近年まで同家に藏せられしより、煙草屋文晁と呼ばれて世に知られたる逸品なり。

十八 王蒙泉聲松韻圖、王紱層巒疊嶂圖題款

十九 陸廣丹臺春曉圖、謝時臣春壑雲泉圖、黃文立山中課子圖、及梅清畫册款印

二十 釋弘仁梅竹高士圖、王翬嵩山草堂圖、董邦達山水册、馬荃蓮花圖、釋虛谷虛橋圖、及前册野呂

介石山中讀易圖款印



水落石出
黃山中人王景為
子文畫

看松
行盡
此

山前
村
岸

兩
橫
屋
曉

松
翠
白
雲
下
橫
河
若
我
間
人
住
時
屋
曉
日
橫
村
南
開
盡

不
一
尺
風
香
淡
翠
翠
空
分
明
遠
近
處
似
在
十
里
外
松
翠
白
雲
下
橫
河
若
我
間
人
住
時
屋
曉
日
橫
村
南
開
盡

松
翠
白
雲
下
橫
河
若
我
間
人
住
時
屋
曉
日
橫
村
南
開
盡

松
翠
白
雲
下
橫
河
若
我
間
人
住
時
屋
曉
日
橫
村
南
開
盡

松
翠
白
雲
下
橫
河
若
我
間
人
住
時
屋
曉
日
橫
村
南
開
盡

松
翠
白
雲
下
橫
河
若
我
間
人
住
時
屋
曉
日
橫
村
南
開
盡

松
翠
白
雲
下
橫
河
若
我
間
人
住
時
屋
曉
日
橫
村
南
開
盡

松
翠
白
雲
下
橫
河
若
我
間
人
住
時
屋
曉
日
橫
村
南
開
盡

松
翠
白
雲
下
橫
河
若
我
間
人
住
時
屋
曉
日
橫
村
南
開
盡



丹臺春曉前

天游為

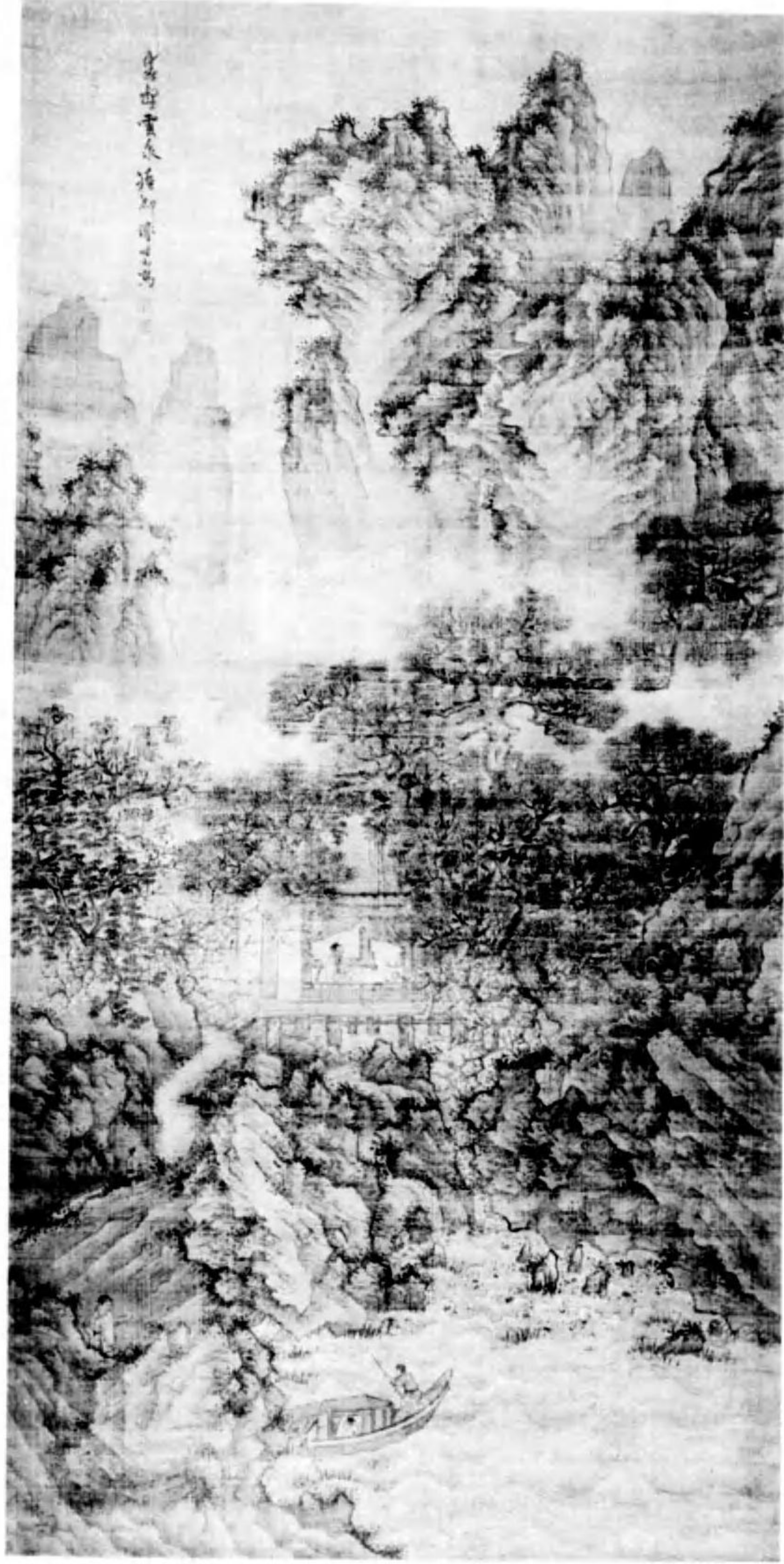
伯顯畫

十年客邸絕塵緣
江上歸來思不羣
云氣浮空春不雨
丹光出井曉成雲
風前龍杖時堪倚
月下鶴笙久不聞
幸對仙翁遠孫子
坐中觀畫

天游文



层峦叠嶂
竹石松栢
老文王孟端书
散斋作





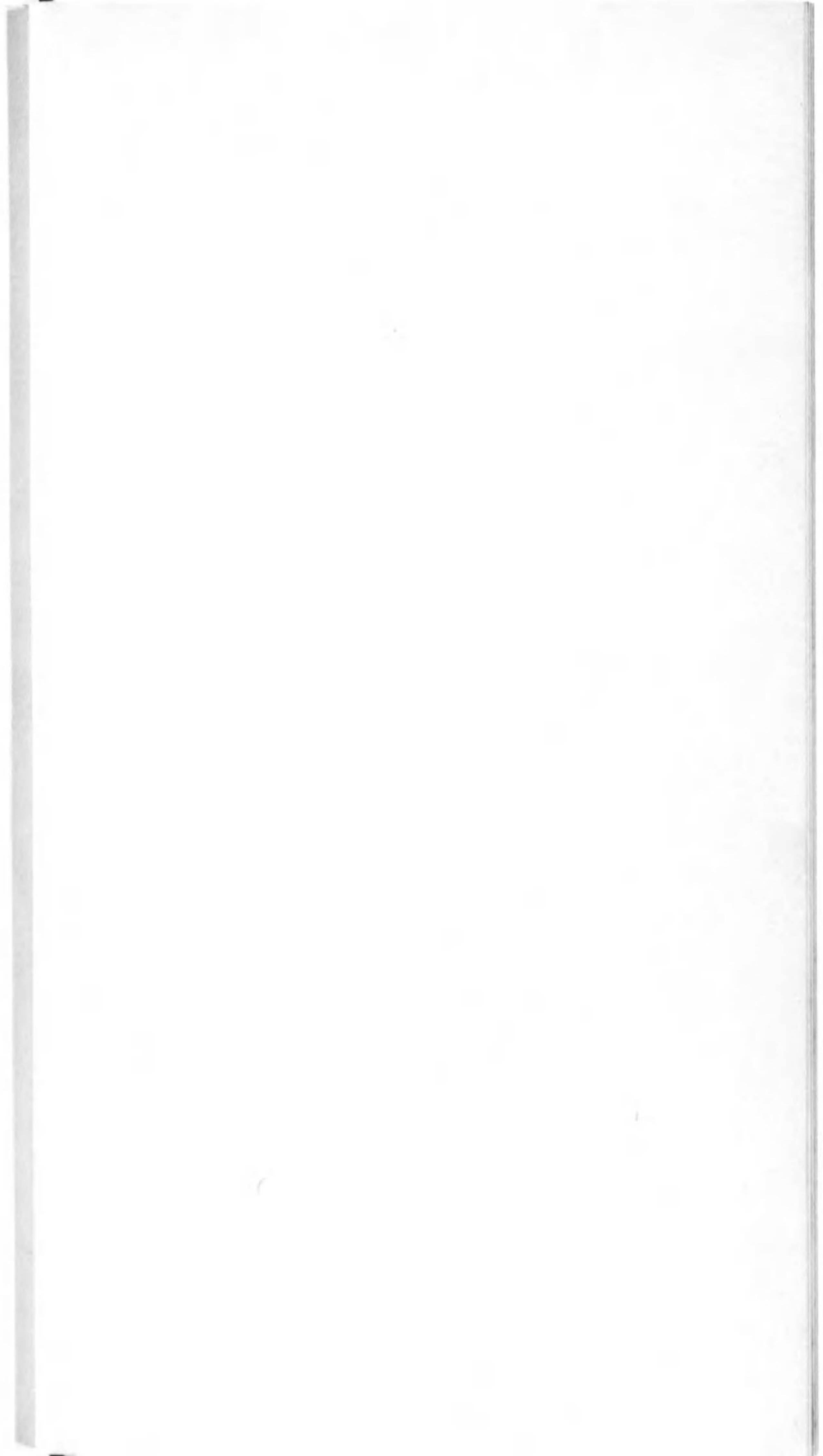






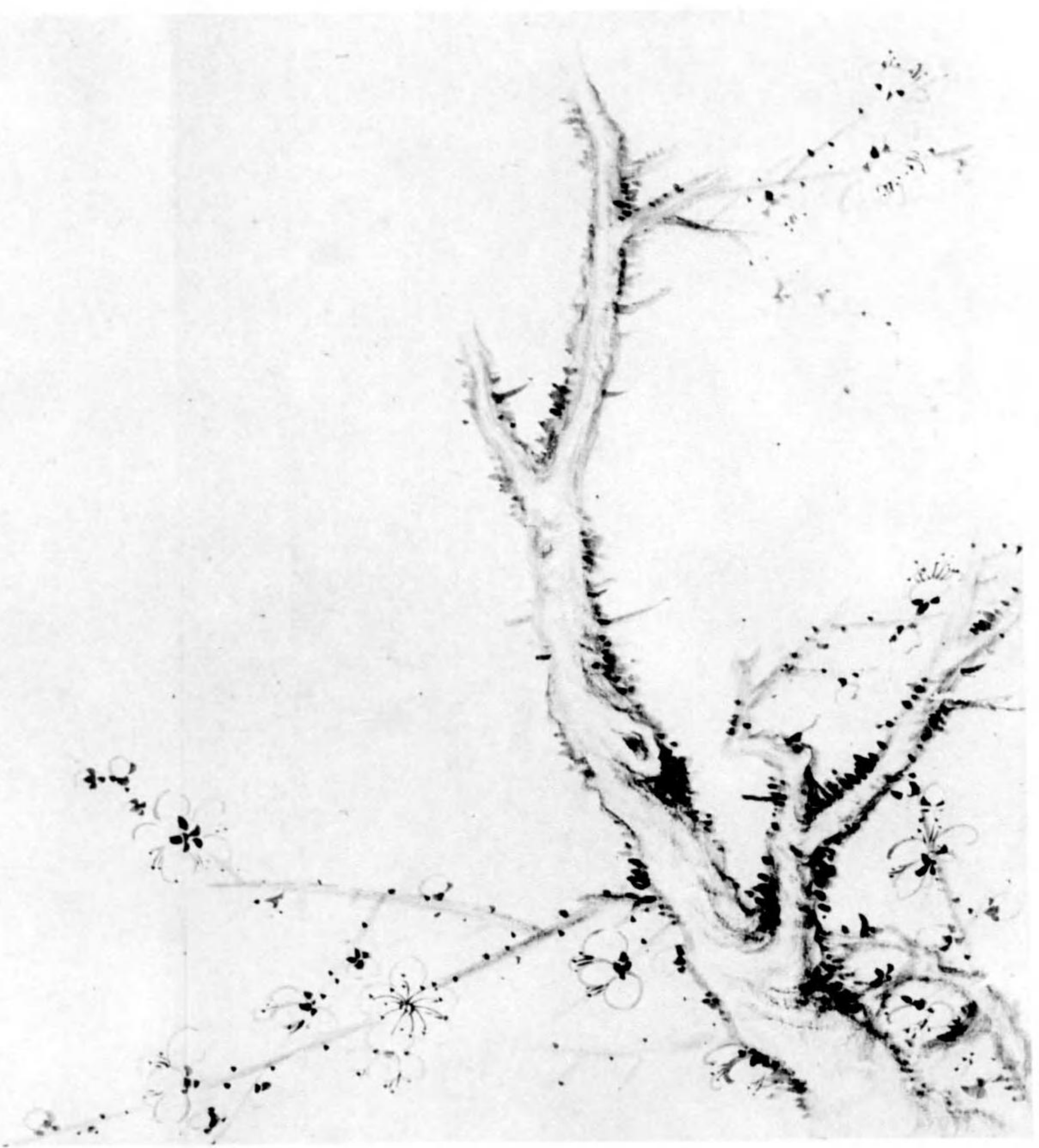


高士的骨千萬種能噴水而不成花和樹竹
這句度亦似不足及秋深暮色
我讀畫史以竹爲第一山水畫中竹最難
以成此畫中竹之妙在畫竹之氣韻
與竹之精神相合而不在畫竹之形
也
壬午年秋月 於上海大華書局



東山
寫
暮
吟
留
清
人
去
不
放
詩
小
亭
聽
秋
泉
影
斜
陽
煙
斜
陽
影
斜
陽
聽
秋
泉
小
亭
不
放
詩
人
去
留
清
吟
暮
東
山
寫





夢杏羅浮月夜時
花十載不題詩
霜筆掃得橫斜影
惆悵多因字
所思
東山
張香



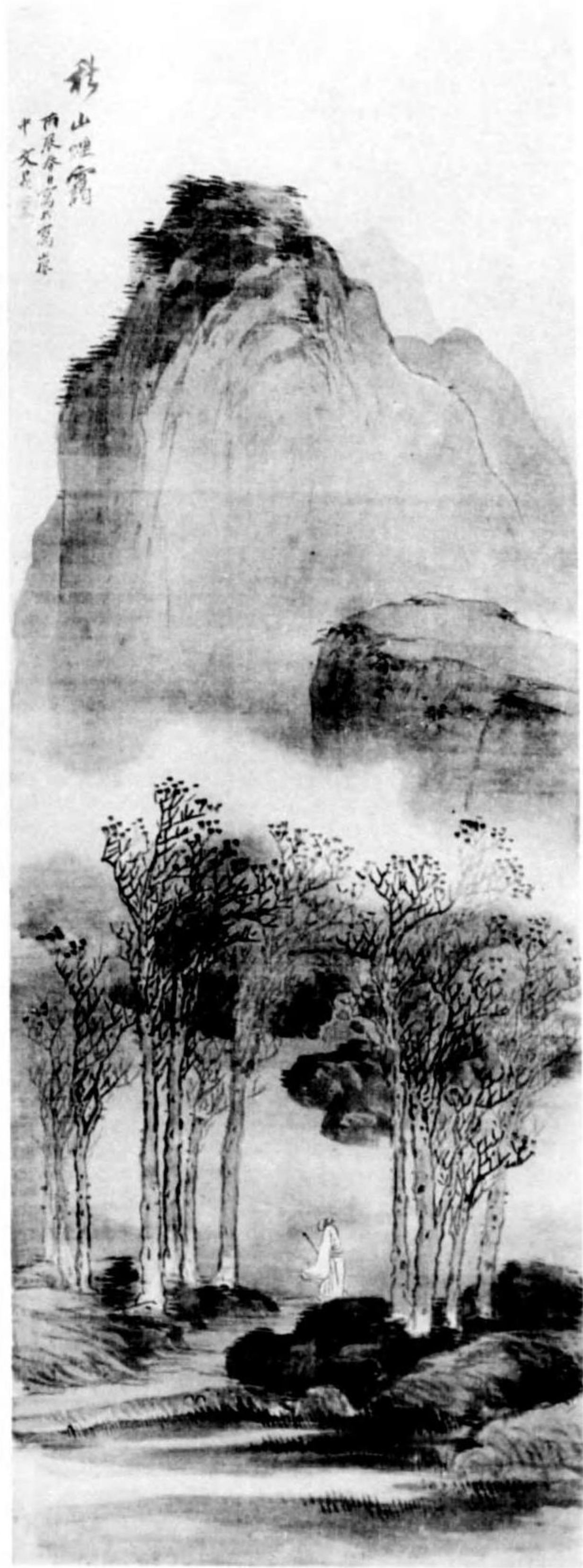


湖光
正午
竹外
青
雨
日
久
人
聲
絕
望
意
氣
蕭
條
寫
圖



竹田全藏





王蒙泉聲松韻圖題識

源竟為送昇聲

沈度



泉聲松韻
黃鶴山中人王蒙為
于文廣文寫



王統層疊嶂圖題識

層
嶂
疊
嶂

洪武癸酉龍日九龍山中
老友王孟端為
叔齋鄉友作此



丹臺春曉圖

天游為
伯顯畫



十年客邸絕塵紛江上歸來思不
玉氣浮空春不雨丹光出井曉成
風前龍杖時堪倚月下鸞為笙
不憫幸對仙翁遠孫子坐中觀

陸廣丹臺春曉圖款印

謝時臣春臺雲泉圖款印

春臺雲泉

黃文立山中課子圖款印

黃文立寫



山中訪衲



梅清畫冊款印

相與生月



東山



翠山



翠山清



釋弘仁梅竹高士圖款印

漸江學人弘仁識

東安草於冬

東山

東山

馬荃蓮花圖款印

澹光丙午仲冬暮南田老人筆
意
江香島崖寫

印圖橋廬谷虛釋

王蒙嵩山草堂圖款印

石谷王蒙

石谷王蒙

石介呂野
印款識中山

石介呂野

石介呂野

大正十年九月六日印刷
大正十年九月六日發行

編輯者

發行所

東京市牛久保區矢野町三番地舊野十二號
大村西崖

東京市牛久保區矢野町三番地舊野八號
丹青社

水上市齊
櫻井口座東京電話七四四番

終

